

留学生センター留学生相談室205号室／名古屋大学留学生相談室

松 浦 ま ち 子

はじめに

2006年度は、名古屋大学留学生相談室（2004年1月設置）の室長をさらに2年間継続（兼任）することになったため、5月の連休明けにIB電子情報館に全面的に引っ越した。それまでは留学生センター205号室と留学生相談室742号室（IB電子情報館）を行ったり来たりしていた。引越しによって時間的ロスは無くなったが、文系の留学生からは遠くなってしまった。地理的不利をカバーするためにも留学生相談室の広報活動を充実したいと思っている。

学外からも多くの相談があったが、中部経済産業局がパイロット事業として夏休みと春休みを利用した留学生インターンシッププログラムを実施するにあたって、名古屋大学では留学生相談室が窓口及び室長が実証調査WG委員となって協力した。各期3名（3社）、12名（9社）の留学生の参加があったが、結果として、企業、大学、留学生のそれぞれに課題があることがわ

かった。2007年度から開始される「アジア人財資金構想」の実施においては、これらの課題への取り組み・解決が図られることと思う。

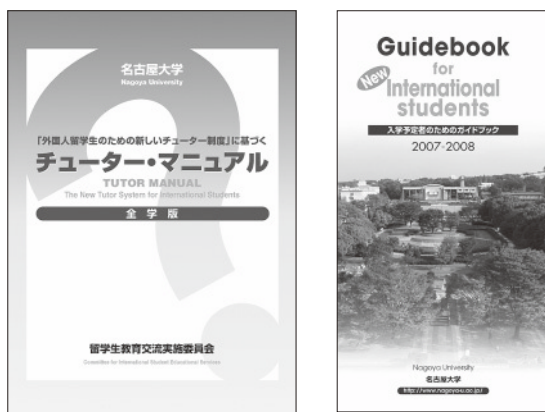
さらに、名古屋大学国際企画室が、9月上海事務所で「入学予定者のためのオリエンテーション」を開催し留学生相談室が協力した。これは、上海近郊に住む名古屋大学入学予定の学生を対象としたが、この体験を生かして年度末には「入学予定者のためのガイドブック」（日英併記）を刊行した。今後、入学する留学生に事前に送付できるよう小型で軽量のガイドブックであり役立つことを願っている。上海で会った学生たちとは、入学3ヵ月後に茶話会を開いて新しい生活の様子を話してもらった。

2006年度は、名古屋大学留学生担当教職員や留学生の献身的なご協力を得て、「チューターマニュアル全学版」、上述の「入学予定者のためのガイドブック」、隔年改訂の「留学生ハンドブック2007-2008」を作成・刊行した。いずれも、時間と労力を使い、知識と知恵

【留学生相談内容と相談件数】

件 名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
指導教員・進路	－	6	1	1	1	2	－	1	－	1	3	1	17
日本語・勉強	－	2	7	1	－	1	4	－	－	－	－	－	15
事務手続き	－	－	1	1	－	－	2	－	－	－	－	－	4
入国・在留関係	2	2	2	4	1	－	－	－	－	3	2	－	16
宿舍	14	22	19	7	25	9	10	8	7	15	23	8	167
奨学金・授業料	4	6	1	7	1	1	3	3	1	－	1	2	30
医療・健康	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	1	－	2
生活・適応	17	9	9	24	4	9	16	8	9	8	31	13	157
家族	4	3	9	3	2	3	1	4	2	－	2	2	35
地域交流	24	15	19	17	10	5	11	10	4	3	6	5	129
人間関係	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	2
NUFSA・留学生会	32	18	9	8	5	3	12	9	10	7	7	10	130
その他	14	9	11	16	6	15	5	10	10	8	17	8	129
計	111	93	88	89	55	48	64	53	44	45	93	50	833

を結集したものなので是非役立ててもらいたい。



I. 留学生相談業務と相談内容

【日本語・勉学】

「チューターマニュアル全学版」(日英併記)を刊行し、留学生相談室は、6月と10月に留学生担当教員がいない部局、教育発達科学研究科、環境学研究科、情報科学研究科を対象にチューターガイダンスを実施した。3部局の学生を対象にするため、ガイダンスは同じ内容、同じ時間(5時限)で3日間設定して参加者を募った。前期は6月19、20、21日でチューター41名のうち19名出席、出席率46%、後期は10月19、20、26日でチューター26名のうち18名出席、出席率69%であった。ガイダンスでは、パワーポイントを使用してわかりやすく解説した。そのパワーポイントスライドは、チューターマニュアル全学版にも掲載した。今後は、同様にガイダンスを続けながら、アンケート内容にも気を配りたいと考えている。

中国からの新入留学生が母国の日本語教師に日本での生活に関するメールを送った。その中にストレスを感じているとか日本人と付き合うのはそんなに簡単ではないと書かれていたため、心配した先生が返事を出したがうまく届かなかったようで、中国から留学生相談室に電話があり、励ましのメールを相談室担当者に送るので、その留学生に届けてほしいとの依頼があり、すぐに希望どおり留学生に渡すことができた。二ヵ月後、日本へ一時帰国されたその先生が留学生と一緒に相談室を来訪された。それほどまでに親身になって留学生の異国での生活を心配してくださる先生の実在に感動した。

【入国・在留】

留学生相談室では、留学生担当教員がいない部局のケアも行っているが、2006年度は教育学部の研究生や研究員のための在留資格認定証明書交付申請について代理申請を行なった。その中には、日本語が上手な仲介者を信頼して本人と一切やり取りがないままに書類選考で受入れを決定しているケースがあり、研究生の受入れとはいえ留学生の「質」の問題を感じた。このケースは、教員が個別に申請していたら恐らくわからなかったと思うが、留学生相談室で複数の申請を取り扱ううちに、同じ筆跡や同じメモのコピーがついていたため発覚し受入れ教員に確認してわかったものである。

また、他大学から留年3年目の学部生の在留期間更新が不許可になったと相談があったが、大学で許可される在学期間に関わらず在留に関わる入国管理局の方が厳しいことがわかった。

1月末、名古屋入国管理局の入国管理行政意見交換会に出席したが、留学生に関しては大きな問題点はなく、在留期間更新時の追加書類(特に経費支弁能力を証する資料)の提出、取消制度の新設、就職活動のための「短期滞在」中のアルバイト、在留資格「留学」から就労できる在留資格への変更のタイミングについて確認するにとどまった。

【宿舍】

1. 名古屋大学国際交流会館

10月には新規渡日留学生全員が国際交流会館に入居できない事態が起きた。国際課の担当職員の尽力で職員用の平針住宅を8戸借りることができた。1戸を2～3人でシェアして住むものであり、大学側が洗濯機や冷蔵庫、照明器具、カーテン等小物に至るまで準備万端調べ、さらに同じ棟に住む住民に一軒一軒挨拶して回る等近隣との関係にも配慮して留学生を迎えた。平針住宅に住む学生を集めてオリエンテーションを開き、事情の説明、近所づきあいについて細かく説明と注意をした。冬に向かって「部屋が寒い」との声が上がり、留学生バザーでお世話になっている近藤産興(株)にお願いして電機ストーブを20台寄付していただいた。これに対して、国際交流担当山本理事名でお礼状を送付した。

また、作り付け家具のレジデンスと異なり、留学生会館居室に関して防災の観点から家具の転倒防止対策

の必要性を指摘する意見があった。

国際交流会館のチューターについては、4月に猪高町宿舍1名（2名応募）、2月にレジデンス1名、留学生会館1名（計5名応募）を募集・面接した。ほとんどの学生が海外生活体験をもち留学生との交流に積極的であり甲乙つけがたい状況だった。

12月頃から民間資金活用事業の一つとして留学生会館建て直し計画が浮上し、留学生担当者数人で検討した留学生宿舍に関する要望等を施設関係者に提案した。その後数回、施設関係者との会議が行われた。19年度も継続してこの計画を推進する予定であり、実現を期待している。

2. 社員寮

5月にトヨタ自動車社員寮1名（3名応募）の面接、2月に2名（6名応募）の面接を行なった。留学生の4月からの宿舍を心配した指導教員から連絡があり、タイミングよく募集があった社員寮に応募させることができた。私費留学生の経済的負担と研究の忙しさでアルバイト時間を確保できない状況を心配した指導教員から相談があったものだが、指導生の生活に親身になってくださる先生の内容をうれしく感じた。同様のことは、服部留学生会館入居時の身元保証人になってくださる先生方にも感じている。

服部留学生会館に関しては人物保証という意味で身元保証人を必要とされているが、機関保証制度が確立している名大では留学生が先生から身元保証人になることを断られて困るケースが続出した。その都度、債務負担は期待されていないこと等、服部海外留学生育英会の考え方を説明し大学としては留学生に保険加入させ機関保証と同等に考えている旨を説明し了解してもらった。服部留学生会館入居希望者は、女子27名、男子14名の計41名であり、うち7名が入居した。

NGK インターナショナルハウス10月入居者募集は女子1名（3名応募）、男子2名（5名応募）が入居し、4月入居募集は追加募集も含め、女子8名（25名応募）、男子12名（14名応募）であった。

3. 民間アパート等

一戸建の家の二階部分を使用する宿舍提供があった。かなり広く家具などもそのまま使用可である。仕事の傍ら途上国への支援活動を行っている家主は、名大卒の元留学生とも親交があり、家主の希望どおり留

学生夫婦が借りることになった。機関保証を含め契約手続きを留学生相談室で行った。

5月末、車を出して久しぶりに留学生の引っ越しを手伝った。仲間の留学生たちが手伝っている様子を頼もしく眺めた。6月初旬、緊急入院した学生の親が心配して来日した際、学生のアパートにしばらく滞在することについて家主に連絡・了解を得た。

元留学生と本州建設社長さんとの親交が実を結んだ名大留学生用アパート「メヘルバン本州」が2006年3月に完成した。8月、同僚たちとそのアパートを見学したが、新瑞橋から徒歩8分、3階建ての新築できれいなアパートは最新の設備が整っており気持ちのよい空間だった。

一方で、宿舍に関するトラブルがいくつかあった。退去時の原状回復費用の問題や転居希望、置きっ放しの所有者不明の荷物、違法駐車などである。さらに騒音に関する苦情もあり、全学的に「地域のアパートに住んでいる留学生の皆様へ」を作成・掲示した。退去した学生が郵便局の転居届を出さなかったようで、届いた郵便物が溜まっていると家主から連絡があり、受け取って学内便で本人に渡すとともに転居届を徹底するように指導した。

【奨学金・授業料】

私費留学生の多くは授業料免除申請をしているが、結果通知が半額免除や不許可の場合、お金が準備できず相談に来る学生が必ず数人いる。その中の一人は、財団法人日本国際教育支援協会の短期貸付制度を利用して8万円を借り入れ、他は大学（名古屋大学留学生後援会）の貸付金5万円と貯金をはたいて何とか半額免除の授業料を工面した。短期貸付制度を利用するには連帯保証人が必要であり、連帯保証人の資格として、アルバイト先の雇用主や従業員、学生等は認められないと書かれている。さらに、この学生の部局では指導教員は保証人にならないという申し合わせがあるため、留学生相談室担当者が保証人になった。このような学生にとって留学生相談室は最後の砦、頼みの綱なのだ。2ヵ月後からの10回払いの返済計画である。その後、この学生は毎月8000円を振り込むと留学生相談室へ明細書を見せに来るようになった。保証人になった担当者に報告に来るのである。アルバイトや食費を切り詰めながらもきちんと返済している姿勢を頼もしく感じている。この苦労はいつか実るだろう。

これまで、留学生担当者として、仕事柄やむを得ずとはいえ、いろいろな場面で留学生の保証人になってきた。そしてわかったことが一つある。日本人であればよく知っていて信頼できる人の保証人にしかならないと思うが、留学生の場合、よく知らなくても保証人になることで信頼関係が生まれるのだ。この逆転の状況はとても興味深い。

授業料免除申請書の指導教員所見欄への記入依頼があった。学部2年生の場合、担任とのつながりが薄いらしく、時々話しに来る留学生は留学生相談室担当者の方が生活状況を理解していると思うようだ。

退学したつもりで留学生から、10月末後期の授業料が引き落とされていると苦情相談があった。話によれば、6月に退学することを指導教員や留学生担当教員に話し、退学の手続き書類をもらったがすぐに一時帰国したので未提出だった。その後、大学からは何の通知もなかったが大学に責任はないのか？が本人の言い分だった。

また、奨学金に応募するために推薦書を書いてほしいと言ってきた学生がいた。この学生は入学当時からよく知っており、推薦書の依頼は自然の成り行きであったが、どの奨学金かと見ると留学生担当者が選考委員になっている奨学金であったので、奨学財団の了解を得て推薦書を書いて渡した。

少額の奨学金Aを得ている学生が、より高額な奨学金Bに採択され二者択一を迫られた時、A財団の人がいろいろ親身になって対応してくれることから、経済生活の困難さはあるもののAを継続することに決めた。金額より豊かな人間関係を選んだ学生に拍手を送りたい。この学生が相談に来て、話を聞いているうちに学生がすでに心を決めているのを感じた。人に話すことで自分の決心を確固たるものにしたかったのだろう。

【生活・適応】

(1) アルバイトに関しては、一般的には国際課で受付、掲示により募集しているが、留学生相談室に直接相談があるものについては、できるだけ協力するようにしている。留学生は、仕事内容や時給の面で通訳や翻訳の仕事を希望するがそれほど頻繁に求人があるわけではない。通訳では愛知県警からの通訳者募集もあった。また、英会話講師募集などは「ネイティブ・スピーカー」希望が多く、英語ができるアジア

からの留学生にとって壁となっている。また、野外民族博物館リトルワールドから館内の雰囲気合う留学生のアルバイト募集があり、数人が協力した。アルバイトは生活や学費のためだけでなく、外国人であること、母国語と日本語の通訳ができることを活かして日本社会に入り日本理解を深めてほしいと願っている。

(2) 就職に関しては、留学生相談室では、留学生採用に関心のある企業からの相談に応じて、学内で会社説明会を開催し留学生と企業に「出会いの場」を提供している。秋には留学生に対する企業からの就職求人との相談が増え、日本の好景気を裏付けている感じを持った。主な対象国は中国、ベトナム、タイである。2006年度に相談があった企業は15社(延べ数)、うち6社が会社説明会を開催し計47名の留学生が参加した。さらに、就職支援室との情報交換会を行い、全学の動きや留学生の状況を共有した。2007年度に向けて、留学生相談室では「留学生のための就職・キャリア教育支援プログラム」を企画している。

(3) 「はじめに」で書いたが、中部経済産業局の留学生インターンシップ事業が行なわれ留学生相談室が協力した。覚書の作成・発行、保険加入証明、資格外活動許可の確認、会社との連絡、ドタキャン留学生の辞退理由聴取等、どれも新しい経験であったが、留学生の日本企業への関心の高さを知れば知るほど、組織的な対応の必要性を感じた。

(4) インターネットで取得した自動車の国際免許証を有効だと思い使用していた学生が警察から注意を受けた。その1件から留学生の口コミでインターネットの国際免許証情報が広がっている様相に注意喚起を掲示した。大学としては留学生に車の運転は勧めていないが、大学から遠い市営住宅などで家族で生活している場合には便利な必需品のようである。しかしながら、車の購入経路や車検、自動車保険(自賠責と任意保険)等をきちんと理解し加入しているか心配は尽きない。

【家族】

留学生相談室が実質的に運営しているNUFSA主催「留学生の家族のための日本語・日本事情」コース

(以下、「家族の日本語」)の2006年度の受講生数は、前期41名、後期37名、合計78名であった。このコースでは、子どもの保育園入所のための就学証明書及び添付文書を発行している。日本語講師に受講生の学習態度、出席状況を確認し、さらに担当者が本人に面接して文書を作成・発行している。最初は室長名で発行していたが、途中からはより実質的に状況を把握している事務担当者名での発行にした。学外からの受講希望者に対しては、受入れガイドラインを策定し、それに沿って受け入れの可否を判断することとした。1994年秋以来「家族の日本語」を経済的に支援してくださっている名古屋栄ライオンズクラブの例会で、毎年2名の受講生が日本語でスピーチして学習成果をご披露しているが、受講生にとって日本語能力の向上と自信につながる大切な機会である。最近では、事前のクラスでリハーサルを兼ねてクラスメートの前で発表している念の入れようである。また、受講生数の減少で、運営資金が不足しがちであるため、名古屋大学留学生後援会に依頼して補助金を5万円から10万円に増額してもらった。平成19年は名古屋栄ライオンズクラブの15周年にあたり、その記念事業について「留学生や家族による日本語スピーチコンテスト」を企画予定との相談があった。10周年の時には、名古屋大学中央図書館に留学生のための図書(200万円)の寄付があり、3階に留学生コーナーを作って日本に関する図書を配架したものである。

さらに、12月中旬、名古屋大学を住所とする銀行や郵便局口座について千種税務署の一斉調査があり、自己申告の結果、このコースの講師謝金も課税対象ということがわかり、税務署員の指導に従って平成15年～平成18年分の税金の支払い、講師から税額徴収、さらに文書作成等、慣れない仕事に関った。しかしながら、講師謝金はわずかであるためその所得税額は少額である。

母国で一人暮らしの年老いた母親を呼び寄せたいとの希望があり、在留資格「家族滞在」が配偶者と子どもを対象にしているため母親を呼び寄せる在留資格がないことを説明した上で、名古屋入国管理局に相談した。とりあえず「家族滞在」を申請するしかないとの返答であった。日本でも老人の一人暮らしを心配する家族は多いが、「母国の文化では長男である自分が面倒を見るのが義務だ」と主張する留学生を理解できるものの嫁いだとはいえ姉がいるのでは在留資格取得は

難しいのではないかと思った。それっきり留学生からの報告はなかったが、年度がかわって2007年8月、約1年ぶりに来室した留学生から報告を聞くことになった。「ビザはもらえたが、母親の健康がすぐれず日本へは来れなかった。母親は数日前に他界したが、親身に相談にのってくれた先生にお礼と報告がしたかった」とのことだった。

【地域・交流】

(1) 地球家族プログラムは、「留学生相談室」が担当して、地域の日本人の家庭に留学生を招くホームステイを実施している。2006年度も多く留学生が参加し日本人家庭を体験した。担当者(鈴木香津代)からの報告を記載する。

◆ 平成18年度はホームステイプログラムを9回実施し、参加者数は計156名/申込み数171名であった。国別では、中国・韓国の学生が圧倒的に多く欧米の学生は少ない。ホストファミリーの参加を増やすため「ホストファミリー懇談会」(5/10)と「ホームステイ交流ワークショップ」(9/10)を実施した。前者では受け入れ体験談を共有し、後者は「揚輝荘の会」の協力を得て「聴松閣」で戦中戦後アジアの留学生を受け入れていたという貴重なお話を当時の様子を知る三上氏から伺った。さらに、『地球家族プログラムだより』を作成・配布した。これらが功を奏したのか徐々にではあるが確実に増えつつある。

留学生に対しては、ホームステイ前の疑問や不安を軽減するため「ホームステイオリエンテーション(参加型セッション)」を実施したところ、他の学生との共感が大きな安心材料になったようである。法学部の国際大学セミナー(8月、2月)参加のため1～2週間来日した学生等32名も地球家族プログラムを利用したが、ごく普通の日本の家庭での体験は彼らの日本観をより深く豊かにするようで好評であった。

ホームステイ効果を知るため、参加学生30名とホストファミリー30家族を対象に交流終了直後、及びホストファミリーには3ヵ月後にも、アンケート調査を行い興味深い結果を得た。その他、IPAの会によるしめ縄講習会がアットホームな雰囲気で行われた。様々な団体のご協力に感謝しつつ、今後とも留学生にとって価値ある体験がさらに充実するよう、努力・工夫をしていきたい。

(2) トヨタ自動車(株)主催「トヨタ見学会」は2006年度も3回(8月, 11月, 3月)実施していただいた。参加者数は, それぞれ8名, 16名, 6名であり, 各回40名規模で実施していた昨年度までと比べ大きく減少した。理由として, 2006年度からは, 集合場所が名古屋大学から豊田市駅になったため交通の不案内, 交通費の負担(往復1420円)に加え, 午後からの実施のため, 豊田市駅解散が17:30で, 夕方からのアルバイトに間に合わない等が考えられる。トヨタ自動車見学会に関心がないとは思えないので, 減少した要因を排除できるようトヨタ自動車とも話し合っていきたい。

(3) 名古屋栄ライオンズクラブからは, 2006年度も「家族の日本語コース」へ多大なご支援をいただいた。4月と10月の開講式や7月と12月の持ち寄りパーティーには会長はじめメンバーの方々にお忙しい中をご出席いただいて, 日本語コースの状況を見ていただいた。さらに, 2月のライオンズクラブ例会には, 受講生を代表して中国のパン暁明^{シャオミン}さんと梁蘭鳳^{リョウランフウ}さんの2名が出席し, 日本語でスピーチして日頃の学習成果を披露した。パンさんのスピーチはNUFSA ニュースレターに掲載予定である。

(4) 小中学校の「総合的な学習の時間」の導入による国際理解教育への留学生派遣業務については, 「留学生相談室」が担当している。担当者(白石慶子)からの報告を記載する。後述の資料〈地域社会と留学生との交流〉も参考にしてもらいたい。

◆ 約1200名の留学生が在籍する名古屋大学は小中学校の国際理解教育のニーズに対する受け皿という役割を果たしている。2006年度は, 7小学校, 6中学校, 2高校から派遣依頼, あるいは交流依頼があり延べ人数で45名の留学生が参加した。小学校は交流的カラーが強く, 中学校では分散学習や社会科の学習目的での留学生との交流が多い。留学生相談室では募集要項(日本語・英語)作成・掲示, 問い合わせへの対応, 応募者の取りまとめ, 学校や留学生との連絡など時間と労力が必要な業務を行なった。しかしながら, 学校側には依頼すれば希望どおりの国の留学生を派遣してもらえるという大学への過度な期待があるように思われる。また, 学校として初めての経験で, どのようなプログラムにしたらいのか分からないというケースも

ある。一方, 大学側にもいつも同じ留学生を派遣しがちな問題がある。小中学校で楽しい時間を過ごした留学生はプログラムの進め方も上達するため, 何度も申し込んで来る。また日本語が話せなくても派遣できるシステムがあればより多くの留学生に学校訪問の機会を与えることができると考える。その意味で, 国際開発研究科のEIUPとの連携は大切である。

(5) 独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)の2004年度から3年間の継続事業である留学生地域交流事業「児童養護施設の子どもたちと留学生のこころの交流」の企画委員長を務めた。2006年度は, 南山寮と日本児童育成園(岐阜市)の2施設を対象に実施したが, 初めて岐阜市の施設を訪問するにあたり, 岐阜大学の留学生も募集した。研修セミナーでは, 山中令子氏が「人を啓き, 社会を開き, 未来を拓く国際理解教育」と題して講演され, 駒方寮の施設長柴田弘二氏が「児童養護施設の現状」についてお話された。詳細は, 2007年3月に刊行された事業報告書に記載されている。この事業は留学生に対しては, 日本の先進技術等を学ぶだけでなく, ありのままの日本を見ることで, 将来指導的立場に立つ可能性のある彼らに人間的な成長を促すものであり, 留学生に与える教育的効果は大きいと考えている。世の中は, いろいろな面で変化し発展しているが人の心は変わらない, 変わらないものの大切さを学んでもらいたいと思うし, 将来的にはこのような境遇の子どもが減ることを願っている。

(6) 同様に, 独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)のもう一つの留学生地域交流事業として「地球家族セミナー in a training camp」実施に留学生相談室の高木先生とともに企画段階から関わった。これについても報告書が刊行されている。日本人学生と留学生を対象にしたこの合宿セミナーの目的は「一緒に考えよう! 身近なこと, 世界のこと!」であり「世界のひととともだちになろう」である。このセミナーは予想をはるかに超える教育効果があった。寝食をともにしたこの合宿セミナーは留学生と日本人学生のよい交流を育み, また参加したいという希望が多く寄せられた。JASSOでは, この企画を「児童養護施設…」に替わる3年継続事業としたい意向であり, 今後も協力していく予定である。

(7) 愛知留学生会後援会では、2006年度も愛知留学生会の交流活動を支援し、同時に愛知県内の大学で学ぶ留学生を対象に緊急援助金事業を行なった。5大学12名（名古屋大8名）に合計117万円の緊急援助金を支給した。緊急援助金申請の審査結果通知には支給金額とともに支給条件として次のように記載している。『返済義務はありませんが、将来的に余裕ができたときにお返しくだされば、他の留学生の緊急援助金として役立てさせていただきます。』これを受けて、2004年3月に支給した留学生が、2007年2月事務局を訪れ、4月から就職することが決まったので4月以降になるがあの時もらったお金を返したいと約束、実際に2007年4月初めてのお給料が出てすぐに「あの時は本当に助かりました」と感謝の言葉とともに返しにきた。感動的な印象に残る出来事だった。この学生に、4月にお金ができた時に来ればいいのに、どうして事前にそれを言いに来たのか尋ねると、言葉にすることで約束を確実にしたかったとのことだった。留学生から学ぶのはこんな時である。緊急援助金の資金は「名古屋を明るくする会」からのご寄付であるが、受給した留学生にはお礼状を書いてもらい、それを本人が特定できない形で「明るくする会」の会報誌「なかま」に掲載し、会員の方に実質的に役立っていることをお礼とともに報告している。また、毎年度末にAFSA役員歓送迎会を行っているが、2006年度は元名大留学生が経営するアジアレストラン「MANDALEY」で開催した。この卒業生はAFSA役員経験者であり、思わぬところで先輩後輩のネットワークができた。

【NUFSA・留学生会】

(1) 名古屋大学留学生会（NUFSA）の2006年度の会長は、国際開発研究科のチャールズさん（フィリピン）だった。バザーや名大祭、各種パーティーなどの事業を行なったが、春のバザーの際、電話料金未納によりNUFSA回線が繋がらない事態が起きた。すでに電話番号は品物提供依頼に記載して広報しており、NTTと話し合った結果、番号はそのまま新たに契約しなおすことになった。今後の同様の事態を避けるため、請求書を留学生相談室宛に送付してもらうことにし、NUFSAから費用を預かって相談室が支払い事務を担うこととした。年間約4万円である。また、名大リユース実行委員会と連携し

て留学生バザーに洗濯機等を提供・運搬してもらった。今後リユース実行委員会との連携を継続する予定であり、平成19年3月の「地域連絡会」には実行委員2名が出席した。また、6月NUFSAメンバー、ボランティアとともに(株)近藤産興を訪れ、これまでの多大なご協力への感謝の意を表わすとともにあらためてバザーへの品物提供をお願いした。

NUFSA主催「家族の日本語コース」では、ここ数年受講生が減少し受講料だけでは運営できないため事情を説明してNUFSAから一クラス分の謝金（129,600円）を補填してもらった。

学際的国際学会をめざすFeedForth06から資金面でNUFSAに協力依頼があったが、今回はうまくまとまらず資金協力はしないことになった。しかしながら、FeedForthは名古屋大学の留学生が中心になって行なう学術イベントであり、NUFSAと連携することでより大規模に留学生らしい活動ができるのではと期待している。来年度に向けて調整が必要である。

10月初旬、台湾の成功大学の学生自治組織代表7名が来名するので対応してほしいと国際課及び学務企画課より依頼がありNUFSAが応じた。航空機到着が数時間遅れたため夜8時過ぎに留学生センターでの対面となり10時頃まで双方の活動について、英語、中国語、日本語で活発な意見交換を行なった。成功大学は台湾南部の総合大学で台湾の教育界や企業界から高い評価を受けている大学であり、学生たちの明晰な活動紹介や積極的な発言、友好的態度を好ましく思った。

(2) 愛知留学生会（AFSA）の2006年度の会長は、名古屋工業大学のグエン・レ・コアさん（ベトナム）だった。几帳面な彼は、メールにすぐに返事をくれたため物事がやり易かった。役員交代に伴うAFSAの口座名義人の変更について、前役員が名古屋から離れたため郵送でやり取りしたが、その経験を生かしてコアさんは交代にあたってすべての手続き書類を周到に準備していった。見事であった。愛知留学生会後援会、ACE等との合同会議、リトルワールドへの新入留学生歓迎会（5月）、富士山へのバス旅行（11月）、「第42回留学生の夕べ」（12月）、AFSA役員歓送迎会（2月）が恒例化してきている。「第42回留学生の夕べ」では、一般市民や留学生等



455名が世界の料理や文化紹介を楽しんだ。司会のAFSAメンバーも民族衣装をつけたりジョークを言ったりして雰囲気を盛り上げた。

- (3) 名古屋地域中国人留学生学友会に関しては、1993年の「毒きのこ事件」の時に会長であり、現在は北京大学の教授である陳左生さんが来訪し、あの時に募金活動して残った「鶴基金」を今後どのようにしたらよいか相談があった。中国留学生会が全国レベルで募金活動をして集めたお金が約1300万円、その中から家族の渡航費・宿泊費・お見舞等や病院の治療費関連に約600万円、名古屋大学留学生後援会に100万円寄付し、残った約600万円が「鶴基金」として託された。[鶴基金]は当該元留学生に後遺症が出た場合に使うという規約があるが、その元留学生は元気で後遺症はなく、一方で医療過誤の裁判で1千万円を越える賠償金を手に入れたので今後本人へ

渡す必要はないとのこと。日本の人々の善意でいただいたお金をその趣旨にあう形で支出できるよう現在なお考慮中である。

- (4) インドネシアで開発事業に関する地域団体からセミナーへの参加依頼があり、インドネシア留学生協会が対応した。数人が出席したと報告があり、その後も交流が続いていると聞きうれしく思っている。

おわりに

留学生相談室の業務は、学内にとどまらず地域社会にも広がっている。11月末には香川大学で「地域が支える国際交流」と題して、名古屋大学の取り組みを紹介させていただく機会を持ったが、あらためて留学生に関して多方面に多種多様なネットワークができており、信頼関係がそれを支えていることを認識した。「世界の人の心と文化をつなぐ留学生相談室」のキャッチフレーズはそれを端的に言い表している。特に、このところ留学生の就職関係の相談が多くなっており、担当者の個別対応から組織的対応を考える時期に来ている。留学生が専門知識と能力を十分発揮できる場所で就労できるよう、今後とも地域社会の異文化理解の向上の促進とともに学内留学生に向けては、日本での就職に関する教育指導を行わなければならないと考えている。卒業した留学生たちの社会での活躍は、とりもなおさずよりよい名古屋大学を築いていくことにつながるからである。